

武蔵野（角光嘯堂）

短歌

露ふかき萩の小径を分け行けば

袖に玉散る武蔵野の原

野を環り空を仰げば草の薫り高し

武蔵野の錦嶺 叢原に情あり

月あるも良し 月無きも良し 風露の夕

入相の鐘は淋しく 秋声を送る

解説 武蔵野の情緒を述べた詩。

語釈 ※環＝周囲をまわる。周囲に沿って進む。あちこちまわり歩く。巡回する。※武蔵野＝武蔵野の範囲は荒川以南・多摩川以北で、東京都心までの間に広がる武蔵野台地である。かつては雑木林を初めとする素朴な自然があった。国木田独歩の「武蔵野」は有名。※錦嶺＝錦の峰。※叢原＝草が群がり生える野。くさむら。※風露＝風と露。※入相＝太陽の沈む頃。たそがれどき。※秋声＝風の音や木の葉の散る音など、秋の気配を感じさせる音。

通釈 武蔵野の野原を巡りながら空を仰ぐと、草の薫りが高い。武蔵野の錦嶺、叢原には情が感じられ、月が有るのも良いし、月が無くても風の心地よさ、夕べの露の冷たさを感じながら歩く事が出来る。どこからともなく響き渡る入相の鐘の音は淋しく聞こえ、何となく秋の気配を感じることが出来た。